



撮影：佐々木 信宏

特集 つなぐ 大畑

かつて、1万トンを超えるイカの水揚げを誇り、全国有数のイカの港として栄えた大畑。下北の人間であれば大畑といえばイカというイメージが強いことでしょう。

取材に先がけてさまざまな方にお話をうかがうと、多くの方が「幼いころは、朝ごはんにはイカの刺身を食するのが普通の生活だと思っていた。」「最近ほめつきりイカが獲れなくなった。」と言います。

確かに、近年のイカの水揚げ量は、最盛期に比べ減少しています。しかし、これを「まちの元気の減少」にしてはいけない。

産業に限らず、地域づくりにおいても、限られた地域資源のなかで「創り育てること」が求められる現在。今月の広報むつは、大畑というまちの、これまでとこれからをつなごうと奮闘する方々をご紹介します。

むつ市大畑町

人口：6,777人 平成30年8月1日現在

(男3,135人 女3,642人)

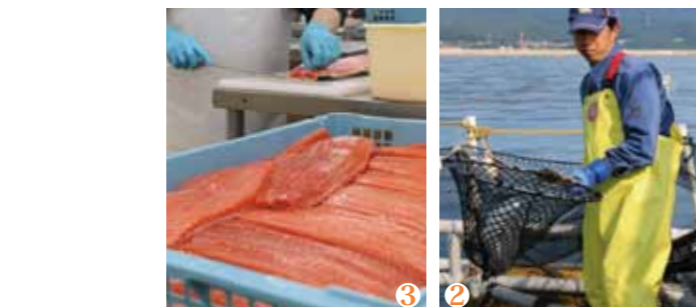
古くは室町時代に遡る歴史をもつ林業、県内有数の水揚げを誇るイカを中心とした水産業が主産業

「このままじゃダメだ」が始まりだった

海峡サーモン そのあくなき挑戦



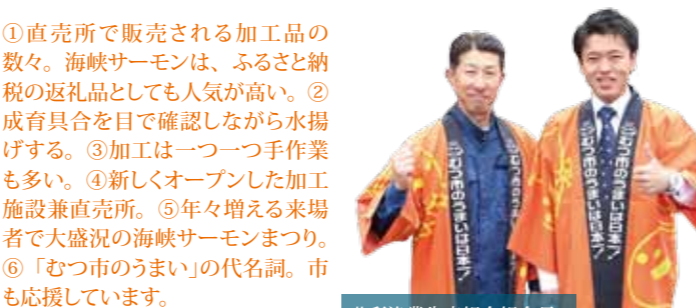
1



2



3



4

①直売所で販売される加工品の数々。海峡サーモンは、ふるさと納税の返礼品としても人気が高い。②成育具合を目で確認しながら水揚げする。③加工は一つ一つ手作業も多い。④新しくオープンした加工施設兼直売所。⑤年々増える来場者で大盛況の海峡サーモンまつり。⑥「むつ市のうまい」の代名詞。市も応援しています。

北彩漁業生産組合組合長 濱田勇一郎さん

5



6

大畑が好きです



佐々木さんご家族

大畑町関根橋の佐々木さんご家族。ご家族のなかにおばあちゃんからお母さん、お嫁さん、お孫さんまでの女性4世代がつながっている。世代がつながって、このまちで暮らすこと。それこそが「まちの元気」だ。

大畑中3年生のみなさんに聞きました!

あなたの「大畑といえば〇〇」

何ですか?

未来かがやく子ども達は、自分たちのふるさとにどんなイメージを持っているのか。

そこには子どもたちならではの発想や、大人はあまり意識していなかった、新しい地域の可能性が眠っているかもしれません。

そこで、今回は大畑中学校3年生50名のみなさんのご協力を得て、「私が思う大畑といえば〇〇」を大調査しました!

結果! 私が思う大畑といえば...

- 大畑祭り (大畑八幡宮例大祭) 26人
- 自然 (海・山・川・動物・やすらぎの森公園) 9人
- 薬研 (温泉・紅葉) 4人
- 来さまい大畑桜ロード 3人
- イカ 2人
- 海峡サーモン 2人
- 元気な漁師 1人
- 熊 (毎日のように出没) 1人
- 吉田ベーカリーのサンパチ弁当 1人
- 何もない (普通だから良い) 1人

約半数が大畑祭りと回答し、豊かな自然や大畑の豊富な水産資源が続きました。

どれも大畑の誇れる自慢です。子ども達の未来のために、大切に守っていかねばならない宝ものですね。



大畑八幡宮例大祭

このまちに生まれて、このまちで暮らしてきたひと。
結婚して、このまちで暮らすことになったひと。
都会に出たけどやっぱりこのまちで生きてみたいと思ったひとや、
このまちのために なにか新しいことを始めなければと思ったひと。
このまちでいろんな人が暮らしている。
みんなで大畑を未来につなぐ。

続く石段と、木々をぬけて吹く風が夏の暑さを忘れさせる大安寺。このお寺で、関根橋地区の佐々木さんご家族に出会いました。

おばあちゃんのみつさん(写真左)をはじめ、お母さんのまさ子さん(中)、お嫁さんの可奈さん(右)とその娘の望結ちゃん(表紙左)まで、親子4世代の女性がつながっている佐々木さんご家族。

まさ子さんは北関根から、可奈さんは田名部品ノ木からそれぞれ大畑に嫁いできた方。私たちは、「このまちで生まれ育った」「このまちで暮らすことになった」いろんな人たちがここに暮らしているということとを、佐々木さんご家族に重ねて感じます。

みつさん、大畑は好きですか? 「好きですよ。大畑の良いところは、大安寺があるところ。昔は

お花見の時期にはここでお祭りがあつたりして、賑やかしたもんですよ。」みつさんはすぐに答えてくださいました。元気の秘訣は、お母さんが作ってくれたお料理をなんでも食べることで、たまに楽しむちよつとのビール。大畑はイカのまちですから、イカも大好きと言います。

「ここは安心して暮らせるまち。今は海峡サーモンとか、みなさん頑張っていますよね。これからは若い方がいろいろ挑戦して、まちを盛り上げて欲しい。最近、まちを歩いている人がちよつと少なくなつて寂しいかな。」とまさ子さん。

「みんなフレンドリーなんです。誰でも普通に受け入れてくれるまちだと思います。」と話すのは可奈さん。

みんな、大畑というまちが大好きです。

「昭和50年頃をピークにイカの水揚げ量が減少し始め、そのとき漁師たちが『このままじゃダメだ』と。当時宮城県などでは、すでに養殖漁業が始まっていて、大畑の水揚げが下降線をたどる中、とてつもない水揚げを誇っていました。津軽海峡に面し、育てる漁業に着目したことは無かった大畑で『これは養殖だ』となったんです。」

北彩漁業生産組合組合長の濱田勇一郎さんは、海峡サーモンの歴史は失敗と挫折の繰り返しだったと言います。

しかし、我慢強く少しずつ蒔いた種は実り、海峡サーモンは、いまでは大畑を代表する魚に成長しました。

「自分たちが食べて、美味いと思えるものでないと売れないから、エサも質は落とさず、品質を維持してきている。それが次につながる信頼になるんです。」

毎年6月に開催される大畑海峡サーモン祭りは、いまや1万2千人を超える来場者を誇り、この春オープンした加工施設兼直売所では、水煮缶詰などの加工品が販売されるようになりました。

ふるさと納税の返礼品としてもトップクラスの人気を博す海峡サーモン。それは、「獲る漁業」から「育てる漁業」へ見事な転換を叶えた希望の光となったのです。